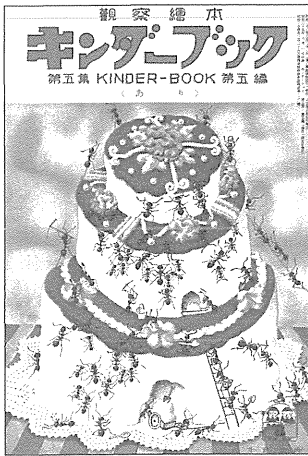


昔むかし の キンダーブック ①

第五集第五編「あり」を読む

吉岡晶子
(元幼稚園教諭)

『キンダーブック』は、今に至るまで八十年以上もの間、おそらく世界で最も長く発行され続けてきた「教育絵本」だ。この新連載は、「昔むかしのキンダーブックはね……」と、かつて子どもだった私たちに、再び「読み聞かせ」してもらおうしさを思い出させてくれるだろう。(編集委員会)



▲画像1 表紙 (武井武雄 画)

戦後復刊されたキンダーブックを数冊見る機会があった^{※1}。その中で表紙の絵にひかれ思わず手にとったのが、この第五集五編(昭和二五年八月発行)「あり」であった。六十年以上前のものである。

春から夏にかけて、たくさんいる小さいアリ。いつも忙しそうで、行列には思わずついて行きたくなり、巣の穴の中、見えない世界は好奇心をくすぐる。子どもたちとかかわり深いアリについて、どう描かれているか、教場面を紹介しながら見ていきたいと思う。

吉岡晶子(よしおかあきこ)
お茶の水女子大学附属幼稚園元教諭。

表紙

三段重ねのケーキにたくさんのアリがいる表紙である(画像1)。ケーキはまるで「バベルの塔」のよう。子どもたちが見たら何と言うだろう。「ケーキ食べてるの? 作ってるの?」「何か運んでる」などつぶやくであろうか。よく見ると、ケーキに穴を掘り、リヤカーに乗せて運んでいるアリがいる。身体の向きはどう見ても引っぱり出しているようだ。やはり自分たちの巢に運んでいるのだろう。甘い物好き、働き者、アリの姿である。ケーキの内側は? 数時間たったらこのケーキはどうなるのだろうか? と表紙だけでたっぷり楽しめた。

ありのうた

ページをめくると、「ありのうた くらはしおじいちゃん」がある。

ありのうた くらはしおじいちゃん

ありの からだは ちいさいが

なかなか つよい ちからもち

おもたい にもつを よく はこぶ

つよい ばかりか はたらきて

あつい なつじゅう なまけずに

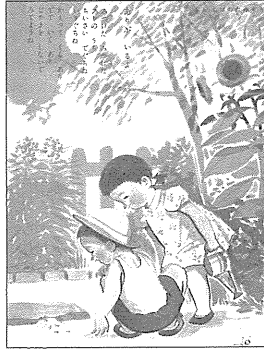
せつせ せつせと せいを だす

表紙の絵と次の見開きページにピッタリの内容である。平仮名で書かれ、柔らかい感じがし、戦前の片仮名文とは印象が違^まう。子ども言葉^{こどもことば}を文字にしたように思わず口にしてみたくなった。「くらはしおじいちゃん」こと倉橋惣三が子どもたちと一緒にしゃがんでアリの見ている姿が浮かび、より一層の温かさが感じられる。思った通り、この詩には曲もついていた(付録「つばめのおうち」^{うた}に掲載)。この後「くらはしおじいちゃん」として書か

れるのは数少なく、他に三回しかない（昭和
二七年六月号、二八年二月号、二九年一月号）。

ありがたいよ

子どもが
二人、地面
のアリを見
ている（画像
2）。表情は
とても楽しそう。



▲画像2「ありがたいよ」
（林義雄 画）

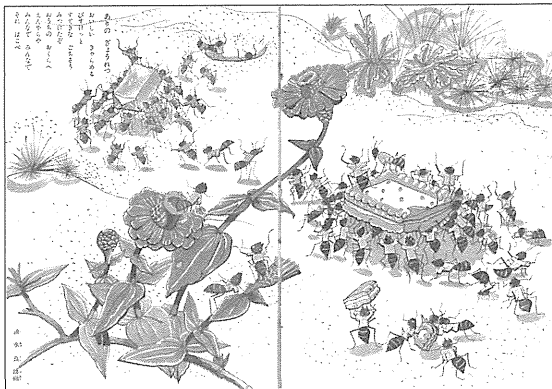
子どもたちはアリが出入りする穴を見つ
め、「どこに行くのかな」「この中はどうなっ
ているのだろう」など思っているに違いない。
子どもが園庭でしゃがんでジーツツとしている
後ろ姿、毎年見かけるあの姿である。文は、
しばのためぞう氏によるもので、以前に比べ
文章が短く少ない。

ありのぎょうれつ

見開きで大勢
のアリがビステ
ットとキャラメ
ルを運んでいる
場面（画像3）。
ガリバーになっ
たような子ども
の目線で描かれ
ている。

「重そうだねえ」
「このアリ転ん
だ」など、子ど
もたちの会話が
聞こえそうだ。

アリは全員Tシャツを着ており、アリの種
類によってシャツの色が異なる。力を出して
貢献しているアリ、掛け声係、誘導係と役割



▲画像3「ありのぎょうれつ」（清水良雄 画）

を担っている。まるでお祭りのみこし担ぎのようだ。収穫物をせつせと運ぶエネルギーとチームワーク、よく見かける光景である。擬人化されてはいるものの、シャツを脱いだら庭先にいる本物のアリの行列に見える。庭にお菓子を置いてみたくなった。

ありのおうち

地面の中に幾つもの部屋が描かれている(画像4)。「アリさん、お家で寝てるかな」「お菓子をどこまで持って行ったかな」などつぶやいて穴を見ている子どもたちの頭の中はこうなっているのだろう。女王がいたりベッドがあったり、想像力をかき立てられ、のぞいてみたい世界である。

以前、子どもたちと大きな紙にアリの巣を描いたことがある。まさにこのような世界で、ブランコに乗ったり学校があったりした。今ならサッカーをするアリたち、パソコンに向

かうアリの描くかもしれない。子どもたちは、本当は違うということはわかっているが、そうかもしれないを楽しむのだろう。しかし、このページでは、各部屋には「さなぎのへや」「たべもののへや」「たまごのへや」など、想像ではあっても事実をしつかり記してある。

多少擬人化されてはいるが、あり得ないことは描かれていない。指導には国立科学博物館の新村太郎氏が携わり、そこにキングダーブツクの科学の芽、目を願う揺るがない姿勢を感じる。



▲画像4「ありのおうち」(中村千尋画)

ありをかきましょう

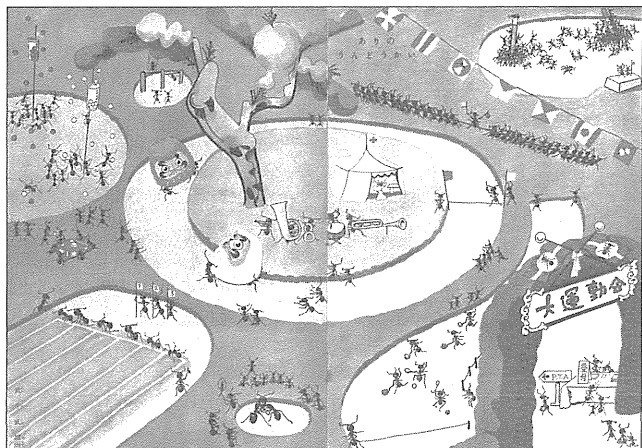
下段に飼う方の文章が歌のように書かれ、卵や幼虫、アリの種類も描かれ、楽しさを含みつつ知識をさりげなく伝えている（画像5）。飼育ケースの絵は「本当にこうなるの？」とやってみたくなるし、実行できそうな気が



▲画像5「ありをかきましょう」（沢井一三郎 画）

する。アリを見ている三人きょうだいの表情が何とも明るい。この時代は三人きょうだいが標準だったのかな、など思ってしまった。

ありのうんどうかい



▲画像6「ありのうんどうかい」（武井武雄 画）

見開きいっぱいには繰り返される大運動会（画像6）。何百匹もいるアリたち、かけっこ、綱引き、スプーンリレー、相撲に鉄棒などあ

ちらこちらでにぎにぎしく競技が繰り広げられ、「ヨイ」「ワッショイ」などの声が聞こえてくる。ボールによじ登って玉入れをするズルアリや、白衣を着た看護師アリもいる。足の踏ん張り方、手の上げ方、顔の向きが絶妙で、それぞれの一生懸命さが動きに表れている。一匹一匹が「これは○○ちゃん」「こっちは○○君」と子どもたちに見えてくる。右下では受付係がプログラムを渡している。

このページは本当に見ていて飽きない。

昔のキンダーブックなのに古くない。今の子どもたちにとっても魅力的であろう。細かい部分、隅っこまでじっくり見たくなり、二度三度と繰り返し開いて何か発見しなくなった。そんな気持ちにさせるページばかりである（個人的には武井武雄の絵に魅力を感じる）。ほかにもアリの生態や外国のアリについて、劇の紹介など多方面からアリをとらえ、関心の広がり示唆している。擬人化された表現は

あってもアリはアリとして描かれ、不自然さを感じられない（戦前には擬人化され宇宙人のような表現も見られた）。キンダーブックの制作に携わる人々は、夢と現実がないまぜになる子どもの感覚を大事にしつつも迎合せず、本物に出合わせたいと願っていたのだろう。その思いが凝縮された本、好奇心をわき起こさせる観察絵本、「科学+絵本」の面白さを再確認した。

「本物は？ 外に見に行ってアリを見よう」。子どもたちがその気持ちになったら、「くらはしおじいちゃん」は大喜びではないだろうか。

注

- 1 キンダーブックは昭和十九年一月発行を区切り休刊になっていたが、昭和二十年八月に再び第一集第一編が復刊となった。
- 2 昭和二年第二集から平仮名に変わる。
- 3 「つばめのおうち」は昭和七年四月号より付録として添付された。